

セイタンの錯覚

—対照法で描かれた部分を中心に

江 藤 あさじ

序

ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-1674) の長編叙事詩『失樂園』 (Paradise Lost, 1667, 1674) には、セイタンの主観的描写が非常に詳細に述べられ、しかもその描写にかなりの部分が割かれている。その悪魔の姿はミルトンの次の世代に大きな影響を与えた。また今日に至っても、悪魔の系譜が語られる時、ミルトンの『失樂園』に拠る所が大きい。それほどの影響力を持つミルトンのセイタンの姿は、ミルトンの真意をはかろうとする時に、読者の意見を時として二分してきた。かつて、ブレイクはセイタンを『失樂園』における真の英雄であるとみなし、シェリーは神よりも優れた存在であると考へた。今日でも、例えばルーサー・リンク (Luther Link) は、ブレイクやシェリーを引用することで18世紀詩人たちによるミルトンの悪魔についての見解を要約した後、正義の暴虐さについて例証するためにユゴーの『あゝ無情』 (Les Misérables, 1862) を引用している。更に、ミルトンのセイタンを「男性的なこの美 (激しく、悲哀に満ちたもの) のこの上ない典型」と見たボードレルを引用することで、19世紀には悪と美が融合するに至ったのだと結んでいる (295-97)。つまり、17世紀以降の絵画世界で成し遂げられた悪魔像の変化の基盤にはミルトンのセイタン像があったことを示しているのである。果たしてミルトンはセイタンの復讐を正当なものとし、彼を美しき悲劇の英雄として描いているのだろうか。

ミルトンは『失樂園』執筆の目的をはっきりと作中で述べている。

what in me is dark
 Illuminate; what low raise and support;
 That to the highth of this great argument
 I may assert Eternal Providence,
 And justify the ways of God to men.¹

(1.22-26)

これほど明確にミルトンの執筆の意図が表明されているにも関わらず、なぜ上記のような誤解が生じるのだろうか。その理由の一つとして、作中において天と地獄が、その細部にわたって対照法で描かれていることが挙げられよう。創造主である光の神と破壊者である闇の主セイタン。神とその御子と、セイタンとその娘「罪」。これらの対照法によって描かれた箇所を通観的に比較すると、両者はまるで対等性を持っているかのようにみえてくる。更にそれは、時として描かれるセイタンの巨大なる存在感と結合し、セイタンの台詞が真実を述べたものであるかのように思わせてしまうのである。しかしそれらは、ミルトンの執筆の目的からすれば錯覚に過ぎないということになる。何故ミルトンは、時として読者を混乱させてしまうほどの対照法でもってセイタンを描いたのだろうか。本論では、この巧みに計算された対照法によって、ミルトンが真に意図した目的を明らかにすることを試みる。

1

まず、セイタンを真の英雄とみなすことが錯覚であることを論証するために、作中においてセイタンの性格や行動がどのように描写されているかを検証する。

叙事詩『失樂園』に登場するセイタンは、神に背いて天国で反乱を企てた。神への隷属状態からの自由を勝ち取り、神と対等なものとなることがセイタンの目的であった(1.40-41)。この目的を果たすべく、他の天使たちの心を巧みに操作して、反乱に加勢するよう誑かしたのである。ところが天の軍勢に打ち負かされ、地獄へと失墜した。ここでセイタンは明らかに敗北を喫したのである。しかも、圧倒的な強さによって惨敗させられたのだ。ところが

セイトンは、“that strife/ Was not inglorious” (1.623-24) と言う。更に、本来自分の傲慢が戦いの発端であったにも関わらず、敗北を喫した今、自分達を反乱へと駆り立てたのは神の挑発に他ならぬと責任を転嫁する(1.637-42)。それらの言葉によって、これから始まるセイトンの単なる逆恨みによる復讐劇に理由が与えられるのである。その理由に正当性を認めてしまい、これから始められる陰謀が、神とセイトンによる因縁の対決のように錯覚してしまった読者がいるとすれば、それはイヴの場合と同様、セイトンの詭弁、つまりミルトンの作為的な詭弁によるのである²。

戦いに敗北し、セイトンは神と自分が対等でないことに十分気付いていたはずである。地獄で目覚めたセイトンがまず口にした言葉 (1.84-92) は、絶望に満ちていた。自分と共に神の高みから失墜したベルゼバブに向けられたその嘆きの言葉は、宿命を共にしている自分にも向けられている。自分が神により墮とされた者であることを十分に自覚しているのである。しかし、心中が深い絶望に苛まれながらも (1.126)、彼は虚勢を張り続けることをやめない。そして、他の墮天使達の復讐心を鼓舞するために惨敗を惜敗にすり替えて、神が自分達に与えた雷という敗北の直接的原因さえ避ければ、自分達の勝利が確実であると説得する。自分達は武力³に屈することのない *esprit de corps* の持ち主であると叱咤激励するのである。

神の不当に屈しない強靱な精神の持ち主であることをセイトンは共に墮ちた天使たちに印象づけた。その姿があまりにも印象的であるために、ブレイクやボードレルのような解釈を生み出したのかもしれない。しかし、神に絶対的信頼を置くことをやめても尚、心の底では神を恐れている姿がミルトンによって次々と描かれていく。それはセイトンが、楽園でイシュューリエルに発見された時に最も顕著に表れている。セイトンはイブに邪心を吹き込むべく、蝦蟇に扮装していた (4.800)。平井正穂の注釈によると、蝦蟇はエリザベス朝の演劇においては醜悪の代表である (上巻、400)。かつて天上においては最も輝ける天使の一人であり、また大言を吐いて神と対等なものにならんとしたセイトンが、いまやそのようなものに身をやつし、一心不乱にな

って、眠っている女性を口説こうとしているのである。美女の寝込みを襲っている間男然としたこの姿は、これだけでも十分品位を失った下劣な者としての印象を与えるに足りる。しかしミルトンは、セイタンの滑稽さを更に描写し続ける。あまりにも夢中になりすぎてあたりの気配に鈍感になっていたセイタンは、既に自分が、警護にあたっている天使によって発見されたことに気付かない。突然背後から天上で鍛えられた槍でつつかれて、彼は本来の姿に戻る。そして彼は、こともあろうに驚愕のあまり飛び上るのである(4.813-14)。それでも尚「虚勢」を張って“*If I must contend, ... / Best with the best, the sender not the sent*” (4.851-52) と言う。しかし、雷の威力を知った今、彼自身が新たな戦いを始めることを拒絶していた(1.644-45)のであるから、これは虚言にすぎない。つまり、目前の恐怖から言い逃れているのである。その後もガブリエルの詰問に対して数々の言い逃れを繰り返すが、セイタンの「虚勢」はある時点で止まらざるを得なくなる。それは神の登場である。神は直接その姿を現すことはない。現れたのは“*his golden scales*” (4.997) であった。ミルトンはこの黄金の天秤について次のように述べている。“*Wherein all things created first he weighed, / The pendulous round earth with balanced air / In counterpoise, now ponders all events, / Battles and realms.*” (4.999-1002) この黄金の天秤の役割はミルトンの考える神の摂理をそのまま物語っている。『キリスト教教義論』(*De Doctrina Christina*, 1669) において“*God always acts with absolute freedom, working out his own purpose and volition*” (209) と述べているように、全てを決定しうるのはただ神においてのみであると述べているのである。そしてこの黄金の天秤が今は闘わないことを決定したのを見て、ガブリエルは言う。“*For proof look up, / And read thy lot in you celestial sign / Where thou art weighed, and shown how light, how weak, / If thou resist.*” (4.1010-13) と。“*lot*” という語は、神の摂理によって定められた予定を意味している⁴。この言葉を聞いて天を見上げ、自分が神の天秤によって量られていることに気付いたセイタンは、一目散に逃げ出してしまうのだ。しかも逃げながら負け惜

しみをつぶやき続けているのである。先ほどまでの大見えを切っていた姿とは実に対照的であり、臆病で小心者の印象を与える場面である。

従って、心中で神を恐れているセイトンの勝利の方程式には、正々堂々という言葉は全く当てはまらない。ミルトンが前もって“guile” (1.34) と軽蔑の意を込めて述べていたように、彼は復讐の方法を“in close design, by fraud or guile” (1.646) とすることを提案する。直接神と闘うことは避け、神の目の届かぬ（とセイトンが思い込んでいる）所でこっそり復讐しようというのである。神の雷を経験した全ての墮天使の中で、この消極的復讐に異議を唱えるものが果たしていただろうか。全員の賛同を得たセイトンは、全墮天使の犠牲となるべく単身で地獄の劫火を抜け出して、未知なる世界の探索に乗り込むことを提案する (2.445-66)。この申し出は御子の肉化の場面に呼応する。しかし彼の真意はイシューリエルに告げた次の言葉に明確に表れている。“Lives there who loves pain?/ Who would not, finding way, break loose from hell,/ Tough thither doomed? Thou wouldst thyself, no doubt,/ And boldly venture to whatever place/ Farthest from pain.” (4.888-92) セイトンは地獄が奈落の底にあり、光の国がはるか上部に存在していることを知っていた。地獄の劫火から誰よりも早くに抜け出せるうえに、単身で偉業を成し遂げたことによって得られる賞賛が加わるとすれば一石二鳥というわけだ。その目論見はイシューリエルに咎められることになるのだが、彼はただ言い逃れをするばかりであった。今や臆病者の集団と化した墮天使たちは彼の真意に気づかずに、その「勇気ある」姿勢に敬服する。こうしてセイトンは地獄における臆病者集団の支配者としての地位を獲得するのである。ミルトンはセイトンの首領としての姿を、時には滑稽さも交えながら、矯飾の施された計算高く臆病なものとして描いていたのである。ミルトンは決してセイトンを真の英雄としてはみなしていないのである。

2

次に、セイトンを神と対等なものとして錯覚させるような対照法で描いたミル

トンの意図を考察する。『失樂園』には光の地として天国と楽園、そして闇の地として混沌の世界と地獄がそれぞれ描かれている。ミルトンは混沌の世界について“where length, breath, and highth, / And time and place are lost” (2.893-94) と描写している。つまり神の存在と同じ状態にあるのである。しかし、混沌を統治していたのは「混沌」と「夜」と「偶然」であり、そこは原子の繰り返す争いによって混乱に満ちていた。この状態は神の創造する秩序ある世界と完全なる対照を為している。そのような世界にセイタンは突入するのである。神の幸いなる世界と全く異なる混沌の脅威を目の当たりにし、セイタンは混沌を神と対立する存在とみなす。そして、自分が地獄（本当は神の造ったものであるにもかかわらず）の支配者として君臨しているように、「混沌」と「夜」がこの独立した帝国“empire” (2.974) に君臨する者であると考えたのだ。セイタンは新しく作られた世界について“some other place / From your dominion won, th' Ethereal King / Possesses lately” (2.977-79) と述べている。神を“the Ethereal King”と呼び、混沌の世界を帝国と呼び、新たな創造を略奪のごとく呼ぶさまは国家同士の領土争いを彷彿とさせる。そして「混沌」に向かって、闇の戦士たるべくセイタンは、奪われた土地を奪還してやると言う。ミルトンはセイタンにこのような戦闘的言葉を使わせているのである。神の国が光の国であるのに対し混沌は闇の世界である。その二者が対立関係にあり、そして闇が光に戦いを挑む様子は、グノーシス主義的二元論の創造神話と完全に一致している。セイタンの目には混沌が、自分たちの地獄と同様、そのように映し出されているのである。果たしてミルトンは、セイタンの見たように混沌の世界をグノーシス主義的悪の世界として描き出そうとしているのだろうか。我々は、セイタンの眼にそのように映し出されたこの世界について、更に考察しなければならない。

ミルトンは二元論的描写を更に続ける。彼は混沌の世界を統治する「混沌」と「夜」のことを“ancestors of Nature” (2.895) と呼んでいる。キリスト教的に考えればこの「自然」は神が創造した世界を意味するであろう。しかしグノーシス主義的に解釈すれば彼らが世界の起源であり創造主であると考え

られるのである。ミルトンはこの「自然」がどちらに属するのかをこの時は述べていない。我々にわかるのは、最近混沌の世界の一部から神によって新しい世界が造られ、セイトンがそのことを略奪と呼んでいるということだけなのである。更に混沌の立場を理解しにくくするものは、「混沌」による次の言葉である。“I upon my frontiers here/ Keep residence; if all I can will serve/ That little which is left so to defend, / Encroached on still through our intestine broils/ Weak'ning the scepter of old Night.” (2.998-1002) ここでの“our”とは一体誰を指しているのだろうか。また「混沌」は、年老いた「夜」の力を弱めたとして神を責めているのだろうか。

まず我々はこれらの疑問を解く前に、セイトンが初めて混沌の世界に入ってきた時のことを思い出さなければならない。彼は神の雷を恐れて混沌の世界に逃げた (6.856-866)。しかし神はセイトン等墮天使たちには地獄という別な場所を設けていた。従って彼らは混沌に住むべき存在ではなかったのである。セイトンにとって混沌の世界は、闇から切り離された地獄と同じ側に属しているように見えたのだが、根本的なところでそれは大きな誤解なのである。混沌の世界が神と同じように“where length, breath, and highth, / And time and place are lost”という状態に置かれているのは、それが“Boundless the deep, because I (God) am who fill/ Infinitude, nor vacuous the space” (7.168-69) という理由が別の箇所でも述べられている。つまり、神の意思によって混沌はそこに、そのような状態で置かれているのである。従ってミルトンが“ancestors of Nature”と呼んだ時の“Nature”とは、混沌を用いて神が自由な意思で作り上げた世界を示しているのである。

また「自然」は“pure immortal elements that know/ No gross, no unharmonious mixture foul” (11.50-51) で構成されており、「混沌」とは正反対の存在に見える。事実、秩序と無秩序は相容れない。しかし対立する存在ではないのである。御子が神の言葉によって天地を創造したときに、無秩序を「自然」からできるだけ遠ざけた。グノーシス主義の創造神話では、戦うことに不慣れな神が闇と戦わせるために人を作り出したとされるが、ミルトンの神

は混沌から人を遠ざけようとしたのである。しかしそれは混沌を恐れたためではない。混沌の「無秩序が作り出す喧騒」“loud misrule” (7.271) から遠ざけようとしたのである。しかも、遠ざけただけで切り離してはいない。ここで我々は天国と混沌、そして地獄の間に存在するものを思い出さなければならぬ。それぞれの領域の境界には、厚く閉ざされた扉があるのである。では樂園はどこに位置を占めているのか。天国の閉ざされた扉の外側にある混沌の領域に、黄金の鎖によって天に繋がれてぶらさがっている神の新たに創造された世界の中に位置を占めているのである。つまり、天と接触しながらも、樂園は混沌の領域内に存在しているのである。神は、創造の際に自分の意思に従って混沌の無秩序に秩序を与え、そして完全に善きものを造った。更に完全に善き者たちを造り、そして彼らに完全に善きものを与えた。では、何故神は樂園を混沌の領域に置いたのだろうか。それはラファエルの“God made thee perfect, not immutable” (5.524) という言葉が説明している。天国の大地にさえも、その奥底には聖なる天使たちに打撃を与えるほどの武器を作り出す物質が残されていた。それらの物質を“Th’ originals of Nature” (6.511) とミルトンは呼んでいる。これは明らかに、混沌の世界に存在していたものを示している。それらは神の光に照らされて秩序を与えられたことにより、自ら混沌を招く争いをもはや起こさなくなっていたのである。天使や人間も同様である。ミルトンは自由意志を尊重していた。そして神により完全に善きものとして造られた者の心にさえも邪念が浮かびうると考えた。それは天の大地の底にある物質と同じように、心の奥底に潜んでいるものなのである。そして御子が出来るだけ遠ざけようとしたものなのである。マーティン (Catherine Maritn) が指摘するように⁵、これは邪心が起こるようにと神が定めているのではないことをミルトンが証明しているのである。混沌は勿論、悪を象徴し罰せられる存在ではない。神は悪が混沌に住むことを良しとしなかった。また天上でセイタンが邪心を抱いても、実際に罪を犯すまでは罰することはなかったのである。ミルトンの混沌は、天使や人が邪心を知っても尚、自らの意思で善を選択することができるように、神によって置

かれている世界なのである。

また「混沌」が光の世界と対立する闇の支配者でないことは、ミルトンが「混沌」を“Monarch”ではなく“Anarch” (2.988) と名付けていることにも示されている。確かにミルトンは「混沌」と「夜」が混沌の世界を統治していると述べた (2.959-63)。しかしそれは、アダムとイヴが、樂園での“power and rule” (4.429) を神より委ねられていたのと同じ意味なのである。「混沌」と「夜」は、アダムとイヴ同様に、自分達の領域を治めるよう神に命ぜられ、そしてそれに従っていたのである。従って「混沌」は、神の言葉には易々として従う。神の言葉である御子が混沌に静まるよう命ずると混沌はそれに服した。そして御子は難も苦もなく混沌の世界に突進するのである (7.210-21)。しかしセイトンには神と同じような「混沌」を統治する力はない。彼は“thence many a league/ As in a cloudy chair ascending rides/ Audacious, but that seat soon failing, meets/ A vast vacuity: all unawares/ Flutt’ring his pennons vain plumb down he drops/ Ten thousand fathom deep,” (2.930-34) というように、神が手を加えないままの状態にしている混沌に翻弄されるのである。その状況を打破するために、セイトンは「虚勢」と「虚言」で「混沌」に迫る。一見セイトンに同調しているように思われる「混沌」の台詞 (2.990-1009) は、決してセイトンに加担しようとは発せられたものではない。確かに“go and speed;/ Havoc and spoil and ruin are my gain” (2.1008-9) という語句も非常に両義的である。というのも“speed”という語は“hasten”と“prosper”の両方を意味するからである。つまり、セイトンを激励しているとも取れるし、また、セイトン自身の破滅に向かって「急げ」と言っているとも取れるのである。しかし、混沌の世界は、被造物が自らの意思で善を選択することができるように、神が手をつけないうまにしている場所であることを我々は既に見た。従って「混沌」の台詞は、悪を選択したセイトンの心が反映されたものであると考えられるのである。

また、セイトンの気持ちに同調した言い方をしても、事実については真実を述べている。彼は自分の見た天国の戦いの顛末を正確に物語り、そして自

分の領土が侵食された原因として、新しく創造された楽園ではなく、第一に地獄を挙げているのである (2.1002-3)。『失樂園』注釈者の中には“our intestine broils”の“our”について“your”の間違いではないかと推測する者がいるが⁶、そうではない。「混沌」は自分も神の統治する領域内に属するものとして“our”と事実を述べていたのである。従って、事実を認識できる「混沌」は、「夜」の力が弱まった原因として神を責めていたのではなく、事の発端であるセイタンを責めていたと考えられるのである。

確かに、地獄と混沌の世界は、阿鼻叫喚を引き起こす点では似ている。しかし地獄は、混沌の世界に神が手を加えた“A universe of death, which God by curse/ Created evil, for evil only good,/ Where all life dies, death lives, and Nature breeds,/ Perverse, all monsters all prodigious things,/ Abominable, inutterable” (2.622-26) であり、一方混沌の世界は神によって置かれている無秩序の世界である。「混沌」は神が秩序を与えて善きものを作り出すための元素の集合体に過ぎず、秩序が与えられていないために無秩序なだけなのである。セイタンは天と楽園に対立するものとして混沌と地獄を同一視した。そして、神に対立する闇の代表者として闇と光の戦いを起こそうとした。しかしセイタンの二元論的解釈は、彼の錯覚に過ぎなかったのである。事実「混沌」は、神の光に決して近づこうとはしなかった (2.1034-39)。それは神こそが光を闇とを分けたからである。混沌は決して神に対置される存在ではない。神によって創造され存在を許されている世界なのである。こうしてミルトンはセイタンに錯覚させることで二元論的世界の存在を否定し、神の絶対性を証明したのである。

3

最後に、対照法で描かれているもう一つの箇所を考察しなければならない。それは神と御子、そしてセイタンと「罪」の関係である。「罪」はセイタンの野望を聞くや否や、セイタンこそが自分の創造主であると認め、次のように述べた。

Thou wilt bring me soon
 To that new world of light and bliss, among
 The gods who live at ease, where I shall reign
 At thy right hand voluptuous, as beseems
 Thy daughter and thy darling, without end.

(2.866-70)

ここで我々は、セイトンが彼女にもたらしてくれるであろう新しい世界が至福に満ちた光の世界であることを知る。彼女はその世界で神と御子よろしく絶対的地位につき、更にはその世界を支配することを望んでいるのである。この姿はニカイア信条のパロディを形成しているとこれまで多くの研究者が指摘してきた⁷。我々はここでミルトンが『キリスト教教義論』において反三位一体の立場をとっていることを忘れてはならない。従ってセイトンと「罪」が三位一体を形成しているのなら、ミルトンが彼らを異端的存在として作り上げていることの根拠とすることが容易にできるのである。もし彼らが三位一体を為しているというのなら「聖霊」にあたるのが「死」ということになる。ミルトンは『キリスト教教義論』において神と御子と聖霊の関係を次のように述べている。

The Holy Spirit, since he is a minister of God, and therefore a creature, was created, that is, produced, from the substance of God, not by natural necessity, but by the free will of the agent, maybe before the foundations of the world were laid, but after the Son, to whom he is far inferior, was made.
 (298)

まさに「罪」は地獄に落とされる前に誕生し、また「死」を身ごもっている。この誕生の序列はミルトンの神と御子と聖霊の関係と一致している。しかし上掲の「罪」の台詞からだけで彼らが三位一体を為していると断定することはできない。何故なら、「罪」がセイトンの右に座するというのは御子のパロディであり、その御子の姿は『失樂園』に描かれているからである(3.62-64)。

更に、「罪」も「死」も、地獄の門番としての役割を神に与えられて遂行

していたのである。一人地獄からの脱出を試みたセイタンが最初に出会ったのは地獄の門番である異形の姿をした彼らであった。その時、セイタンと「死」は一触即発の状態になったのである。「死」はセイタンに向かって次のように述べた。

“Art thou that traitor angel, art thou he,
 Who first broke peace in heav’n and faith, till then
 Unbroken, and in proud rebellious arms
 Drew after him the third part of heav’n’s sons
 Conjured against the Highest, for which both thou
 And they, outcast from God, are here condemned
 To waste eternal days in woe and pain?
 And reckon’st thou thyself with Spirits of heav’n,
 Hell-doomed, and breath’st defiance here and scorn
 Where I reign king, and to enrage thee more,
 Thy king and lord?”

(2.689-99)

この言葉は、後にセイタンが樂園に侵入したところを捉えられた時に発せられたガブリエルの警告（4.962-67）に呼応する。「死」はセイタンに向かって“False fugitive”と呼びかけ、神に与えられた罰の場である地獄へと戻るよう警告する。ここで、まだ親子であることを知らないとはいえ、息子である「死」がセイタンに対し、自分が“Thy king and lord”であると宣言していることに注目しなければならない。「死」はセイタンを支配する立場なのである。また地獄から脱出しようとする者を断固として制しようとする者なのである。更に、セイタンは神を“God”と呼ぶことは無いが、「死」は“God”と呼んでいる。その姿勢から、彼が神の命令を聞く存在であるということがわかるのである。また「罪」に至っても同様である。彼女はセイタンに出会い「虚言」によって誘惑されるまで、既に墮落した存在であるとはいえ、神の命令に忠実に従っていた。彼女の任務は地獄の門の鍵を預かり、何者に対してもその鍵を用いて門を開かないことであった。何者かが無理やり

にでもその門を通過しようとするれば、「死」が一撃を加えることを彼女はセイトンに説明している (2.810-14)。神を除いてその一撃に耐えうる者は (自分もセイトンも含めて) いないというのである。つまり彼女の任務は、人を陥れようとする墮天使を地獄の門の中に閉じ込めておくことだったのである。「罪」と「死」は共に神の統治下にあり、神の摂理に適った働きをしていたのだ。従ってセイトンの目指すところとは一致していない。誕生の序列からみても、彼らはこの時点ではミルトンが異端視した三位一体を形成していないのである。

しかし彼女もまたセイトンと同様に、絶え間なく押し寄せる目の前の苦痛から逃れようと、易々とセイトンの説得に応じた⁸。「罪」の影である「死」もそれに従った。彼らは自分たちを苦痛の淵へと陥れた神への復讐を果たすために一致団結することを決意するのである。この時点で、彼らは三人とも、神の摂理から自らを切り離してしまった。そして彼らの存在意義は、次に述べるカルヴァン主義的運命論と完全に一致すると考えられるのである。

「罪」はセイトンを創造主であると認め、それまでの樂園への悪の侵入を阻むという神に与えられた役割を遂行する者から一変し、今日我々が知っている「悪を生み出す」という罪の意味をもつ存在となる。そして「死」は空腹を満たすために、罪を犯した者を食らう存在となる。そしてかつて天上で奉仕するために存在していたセイトンは、今や “To do aught good never will be our task, / But ever to do ill our sole delight” (1.159-60) と言って、悪から善を生み出すという神の摂理に反して善から悪を引き出すことに専念することを誓い、自らが悪の権化たることを宣言していた。彼らは全員、樂園を崩壊させるためだけに存在するようになったのである。

また、かつてセイトンは、神の雷を受けても自分が消滅しなかったことについて、神の摂理とは別の「運命」の定めであると考えた (1.116-17)。そしてもともと正しく判断する理性が損なわれていたために地獄の門番となった「罪」もまた、神の命令に従っていたものの、セイトンと同様に「運命」を絶対者として見ていたのである。彼女は、自分の消滅が「死」にとっての

消滅を意味し、それが「運命」の定めるところである (2.809) と説明している。ここでファウラー (Alastair Fowler) は、彼女がこの「運命」を神の摂理から切り離された絶対的支配者として見なしていると指摘し (127f)、平井正穂もその注釈に従っている (上巻、361)。自由な意思によって罪を避けることを望むミルトンの神にとって、この「運命」の働きは神の摂理のようにも見える。「罪」も「死」も存在しなければ、人はミルトンの否定する「必然」によって墮落を回避することになるからだ。しかし、樂園にはまだ「罪」どころかセイタンも到達しておらず、人類はいまだ罪からも、またそれによる死からも無縁の状態にある。この時点での彼らの任務は、悪が樂園へ侵入することを制することであった。彼らが自らの意思で神の命令に従っている限り、消滅はありえないのである。というのも、“Not destroy, but root them out of heav’n.” (6.855) というのが神の御心であったからである。彼らの消滅は、彼らの自由意志が神の命に背くことを選んだ結果に起こるのであり、最後の審判にかけられるまでは消滅することはない。自分の死が必然的に「死」の消滅を意味するという彼女の解釈は、自由意志の存在を完全に無視している。それは運命の絶対的予定を表しており、ミルトンが異端視したカルヴァン主義的運命と一致するのである⁹。

ミルトンは『キリスト教教義論』の中で三位一体に異論を唱える時、“This particular Father begot his Son not from any natural necessity but of his own free will.” (209) と御子の誕生について主張している。ミルトンにとって御子は、神と本質においては全く同じ者とは認めていないが、神の神性を分けられて造られた存在である。「罪」もまた父であるセイタンの肉を分けて造られた。しかし、それはセイタンの自由な意思によるものではない。彼女は神の摂理によって生まれたのである。神に与えられた彼女の任務は、現代的意味での罪の働きとは全く異なっていたことを我々は既に見てきた。従って、神の摂理を捨て運命を絶対視したセイタンたちの関係は、彼らの中で“natural necessity”を持つようになったのである。その意味で彼らは三位一体を体現していると言うことができる。更に、セイタンという悪を「罪」

と「死」の創造主とすることで、悪が罪を生むというグノーシス主義的二元論が成立する。これはグノーシス主義的三位一体論の解釈をそこに適応しているものとみることができるのである。

更に「死」はセイトンと「罪」による近親相姦という性的交渉を経て生まれた。そして「死」は自分の母である「罪」を陵辱し続けていた。従って彼らの体現する三位一体は肉の結合でもあるのだ。ミルトンは『キリスト教教義論』の中で神の唯一性を論証するために三位一体観を徹底的に否定した。そして『失樂園』においては、彼にとって異端に他ならないグノーシス主義的解釈と、キリスト教において偶像崇拜と同一視されている近親相姦とをセイトンらの体現した三位一体の姿に織り込んだ¹⁰。そうすることによってミルトンは彼の異端視するもの全てを攻撃し、神の唯一性を証明しようとしたのである。

結

以上みてきたように、ミルトンは決してセイトンを真の英雄として、また神よりも優れた者として描いてはいなかった。セイトンは虚勢と虚言で固められた地獄の王者となった。しかしミルトンは、彼の王者としての威厳をことごとく台無しにする描写を繰り返した。また、対照法で描写された神とセイトンとの関係は、決して対等性を示すためのものでもなかった。光の国に對立するという二元論的闇の国は、そもそも存在していなかった。それは全てセイトンの錯覚であった。また、セイトンと「罪」と「死」は、神の摂理ではない「運命」を絶対視した。ところが、セイトンは神の摂理である天秤を見たとき、無意識にもそれに従っていた。従って、セイトンたちの運命観は錯覚であった。錯覚に陥った彼らは「必然」によって結ばれ三位一体を形成した。それは、グノーシス主義的二元論と、偶像崇拜を象徴する近親相姦を体現していた。つまりミルトンが異端視するものが全て彼らの三位一体に集約されていたのである。二元論と偶像崇拜、そして三位一体は、ミルトンにとっては神の唯一性を否定するものであった。ミルトンはセイトンの錯覚

を利用して、それら全てを否定し、神の絶対性と唯一性を証明したのである。

註

本稿におけるミルトンの叙事詩の引用は、Douglas Bush, ed., *Milton: Poetical Works* (Oxford: Oxford UP, 1988) による。また、『キリスト教教義論』の引用は John Carey, trans., Mourice Kelley, ed., *Complete Prose Works of John Milton*. Vol. 6 (New Heaven: Yale UP, 1973) による。

1. 例えば、William G. Riggs は、セイタンと同じように語り手（ミルトン）が地獄から天上へと飛翔することについて、セイタンとミルトンが同じ目的を有する者であるという解釈について “Milton labors to express God’s will, not his own. He rejects satanic self-sufficiency; he invokes the muse.” (80) という結論に達している。また、“justify the ways of God to men” の解釈について、Richard Strier は、“Either the poet is going to justify ‘the ways of God to men,’ meaning how God treats mankind, or the poet is going to justify ‘the ways of God’ in general, and is promising to do so in terms that will be humanly intelligible . . . but as soon as the action gets underway, we recognized that the second meaning, ‘justify . . . to men,’ must be the intended one.” (170) と述べているが、筆者も同意見である。ミルトンは、難解な神学的な様々な論争を、登場人物全てを駆使して我々に分かりやすく示してくれているのだと考えている。
2. セイタンの説得において、修辞学における三段論法の大前提が架空であることは『失樂園』において度々見られる。この場合は自分が造られたものではないという架空の大前提が挙げられている。またイヴを誘惑する際、自分が知識の実を食べたという架空の大前提を挙げている。詳細は Hiroko Tsuji (辻裕子), *Rhetoric and Truth* (168-69) を参照のこと。
3. 天上での戦いは、地上における武力の衝突と同じように描かれている。しかし、最終兵器である御子の雷は、我々に詩篇の104篇におけるイエスの姿を思い起こさせる。ここで水を去らせたものはイエスの雷の声 (“the voice of thy thunder”) であった。神の御子の言葉は神の言葉である。現世的武力では決着のつかなかった争いに決着をつけた御子の雷は、実際には現世的な武力でなかったのではないかと筆者は考える。Kitty Cohen もこの箇所について “It is spiritual might which is made evident in Book III, in the scenes describing the Son in battle.” (179-80) という見解を示している。
4. “lot” という語は、同じ意味で *Samson Agonistes* の1292行や、*Paradise Regained* の2巻91行などに出てくる。*Paradise Lost* では神自身が “fate, or aught by me immutably foreseen,” (3. 120-21) と述べているので、“lot” と “fate” の間にミルトンが意味的相違を認めているわけではないようである。
5. “For as the poet clearly perceived, without a fully formless plasticity governing both the primordial and the emergent level of material history, ‘logically’ God or good would have to be at least indirectly responsible for Satan or evil.” (77)

6. “The early emendation ‘your’ would seem to fit better the logic of Chaos’s speech.” (Bush, 254f) また、“Pearce’s conjecture ‘your’ is probably right. The intestine broils of the angels weakened Night’s scepter, because indirectly they led to the ‘encroachment’ of creation.” (Fowler 137f) 平井正穂はこの言葉により、「『混沌』はセイトンを味方だと考えている」(364) という見解を示している。
7. 例えば、Fowler 129f、Bush 246f、平井正穂 362.
8. このような「罪」の状態について Martin は、“this means that Sin must be free to open the gates of hell, while metaphysically she cannot ‘shut/ [what] Excel’d her power’ (II, 883-84). That is, she may choose to advance Satan’s cause, but she cannot close a temptation that divine freedom decrees open to all.” (82) という見解を述べているが筆者も同意見である。
9. 3巻111-17行で述べられているように、ミルトンは人間の意思が神に隷属している状態にあるという考えを否定している。Richard Strier は “Christian Doctrine does, in fact, conceive of Luther-Calvinism as a form of devil-worship.” (171) と指摘している。
10. ミルトンよりも遥かに先立って、グノーシス主義の流れを汲むマニ教の二元論に反駁した者がいた。それは、自身が9年間をマニ教徒として過ごしたアウグスティヌスであった。彼はマニ教を否定するために、まずマニ自身を攻撃した。自らを神の摂理により永遠から生まれキリストの使徒となったと語るマニを、彼は三位一体を冒瀆する者として論駁したのである (113-14)。彼にとって男女の性の交わりは墮落にともなう汚れを意味していた。従って肉の結合により生まれたマニを聖霊と同一視することは、彼にとっては許されないことであったのだ。しかし後年、原罪が性交によって受け継がれることに固執するあまり、ペラギウス派に反駁する際に「運命予定説と意志隷従論により、いまやアウグスティヌスの立場をマニ教と区別することは、少なくとも実存主義的には困難になった」(フォーサイス、543) のである。ミルトンは、これらのアウグスティヌスの矛盾を、『失樂園』において見事に克服したと言える。ミルトンはアウグスティヌスよりも更に綿密な計画のもとに、神の絶対性と唯一性を証明して見せることに成功したのである。また、筆者は、男女の性交についてのミルトンの見解を別のところで既に考察した。彼は性交を聖なるものとサタン的なものに分けて考えていたのである。そして墮落前のアダムとイヴの性交については聖なるものとして肯定していた。詳細については、拙稿「アダムとイヴ——結婚の聖と俗」植月恵一郎編『〈男〉と〈女〉のディスカール——シェイクスピアからドライデンまで——』(金星堂、1998):131-55を参照されたい。

引証資料

- Augustine; 片柳栄一訳『アウグスティヌス著作集7 マニ教駁論集』 東京：教文館、1994.
- Cohen, Kitty. “Milton’s God in Council and War.” *Milton Studies* 3 (1971) : 159-184.
- Forsyth, Neil; 野呂有子監訳『古代悪魔学』 東京：法政大学出版局2001. (叢書ユニベルシタス)
- Link, Luther; 高山宏訳『悪魔』 東京：研究社、1995.
- Martin, Catherine Gimelli. “Fire, Ice, and Epic Entropy: the Physics and Metaphysics of

- Milton's Reformed Chaos." *Milton Studies* 35 (1997) : 73-113.
- Milton, John. *Milton: Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1990.
- . *Milton: Poetical Works*. Ed. Douglas Bush. Oxford: Oxford UP, 1988.
- . *Complete Prose Works of John Milton*. Vol.6. Trans. John Carey. Ed. Mourice Kelley. New Heaven: Yale UP, 1973.
- . 平井正穂訳『失樂園』(上下巻) 東京: 岩波文庫, 1990.
- Riggs, William G. "The Poet and Satan in *Paradise Lost*." *Milton Studies* 2 (1970): 59-82.
- Strier, Richar. "Milton's Fetters, or, Why Eden is Better than Heaven." *Milton Studies* 39 (2000): 169-97.
- Tsuji, Hiroko. *Rhetoric and Truth in Milton*. Kyoto: Yamaguchi Publishing House, 1991.
- The Holy Bible*. Authorized Version. Oxford: Oxford UP. n.d.